

長岡山の戦いと「ふるさと教育」

神村ふじを

降る雪や明治は遠くなりけり 中村草田男

この草田男くさたおの句は、俳句に関心の有る無しにかかわらず、誰もが知る句である。切れ字が句中に二つあるのは禁忌だが、草田男なればこそ名句となり得る。明治維新は遙かに遠く150年も昔に遡る。が、今の日本の姿の元になったことは間違いない。その意味で戊辰戦争の終結は大きな転換点であった。

小学校で習う歴史は広く浅い。幕末について教科書の記述では、ペリーが浦賀に来てから明治維新まで500字余り。あくまで中央の視点で淡々と書かれており、子供たちにとってはあまり身近に感じられない内容だ。

私は、以前勤務した学校で、6年生が会津若松に修学旅行に出掛けるときに、戊辰戦争が寒河江さがえに残した痕跡、とりわけ庄内藩士と桑名藩士が官軍と寒河江市街西方で戦った長岡山の戦いを中心に授業を行っている。戊辰戦争と寒河江との関わりは、生きた幕末・明治維新を学ぶのに格好の教材になっている。

旧幕藩体制の有力藩であり親藩大名であった会津、桑名両藩。会津藩主は松平容保公かたもちり、桑名藩主は弟の松平定敬公さだあき。お互い京都で天皇守護という役目にありながら、第15代将軍徳川慶喜公よしのぶの敵前逃亡と目される事件などもあり、薩長の新政府軍が掲げる錦の御旗にたてつく逆賊となってしまう。

庄内藩は大政奉還後の江戸薩摩藩邸焼討事件で、薩摩藩から恨みを買っており、大地主本間家から資金援助を受けて、米国製のシャープス・カービン銃で軍備の増強を図っていたため、会津藩とともに旧幕藩体制の首魁しゅがいと目されていた。

勝海舟らの努力により江戸城は無血開城となったが、庄内、会津藩とともに佐幕派であった桑名藩兵は、宇都宮で官軍と戦い、会津、庄内と転戦することになる。

桑名軍は宇都宮の戦い後、藩主が身を寄せている会津若松へ向かった。しかし、城下手前で定敬公が米沢へ向かったとの報を受け、跡を追おうとしたが、米沢藩はすでに恭順の姿勢を示し、米沢城下へ入ることを拒まれた。

一方、定敬公は、籠城やむなしとする兄容保公と涙の別れをし、福島、仙台を経て函館へと移動

する。行き場のなくなった桑名藩士は、白石、山形、寒河江と移動し、頼みの庄内を目ざすことになった。

9月8日には明治と改元になり、西郷隆盛は庄内討伐のため軍を進めていた。9月19日夜、桑名軍が寒河江に先着していた庄内軍と合流、本町の本願寺で宿営。9月20日早朝の濃霧の中、朝食の途中だった庄内・桑名両軍に米沢藩兵が襲い掛かった。戦の常套手段なのだろう、降伏恭順の藩の兵士は先陣役となり、米沢藩兵は奥羽越列藩同盟の友好藩だった庄内藩にやむなく刃を向けたのである。

庄内・桑名軍400名は、米沢藩兵100名・薩摩藩兵200名と新宿で応戦し、たちまちにして寒河江の町は白兵戦の様相となった。しかし、新政府軍には、後陣に総勢2500余りの薩摩本隊が控えていたのである。桑名軍は地理不案内の上濃霧が立ち込めていたため、たちまち苦戦となり、歴戦の勇士たちも次々と討死。それでも作法通り、首級は敵に渡すまいと介錯を受けここで8名が戦死した。

立見鑑三郎が指揮を執り、沼川沿いに陣を敷いたが、圧倒的な新政府軍の攻撃に、十日市場、西ノ町、上町、六供町を経て、長岡山へ退却。霧が晴れるとさらに新政府軍の猛攻が始まり、庄内・桑名軍は午後になると新政府軍に包囲された。

庄内・桑名軍は包囲網を突破し、北西の白岩陣ヶ峰に移った。左沢にいた桑名藩の神風隊が援軍に到着して、寒河江川に架かる臥龍橋を挟んで銃撃戦になった。

夕刻、新政府軍が渡河、陣ヶ峰に攻め入った。桑名軍は2時間ほどの激しい銃撃戦の後、幸生から十部一峠を越え、肘折、清川を経て庄内藩領へ逃れた。

桑名藩士ら戦死した19名の亡骸は、賊軍であったために官軍の報復を恐れて放置されたままになっていたが、寒河江市本町の曹洞宗陽春院の住職大観和尚が見かねて自院に埋葬した。陽春院には桑名藩士18名と唐津藩士白水良次郎の墓がある。

幕末の世界は、寒河江に住む子供たちと決して遠く無縁なことではなく、身近なところにこのような足跡が残っているのだ。伝えること、学ぶことの意義を大きく感じているところである。

「ふるさと教育」に触れたいがために、また埋もれている史実を伝えたいがために長岡山の戦いのことを載せたが、子供たちはもちろん、このことを知っている大人たちもそう多くはない。語り継がれていないし、教えられていないのだ。

学校では、小中高とも国で定めた学習指導要領に則って授業をしなければならぬ。公教育という立場から、地域格差が出ないように基本的な授業時数や授業日数などが示されているので、その枠から大きくはみ出すことはできない。

近隣でも「ふるさと教育」の名の下、地域に根差した教育を実践している市町村や学校はあるにはあるが、教科書をこなすのが精一杯で、自分たちの身のまわりの学習までなかなか手が回らない

のが実情である。

おまけに、小6・中3で実施されている学力・学習状況調査の数値をいかに上げるかが至上命題のように言われており、学校は汲々とした状態にある。

また、この3月に新しい学習指導要領が公示され、来年度から学校で教える学習内容が大きく変わる。道徳と外国語（小学校5・6年）が教科として導入されることになり、さらに学習内容が増える。限られた時間の中でどのように時数を生み出すか学校では四苦八苦しており、地域のことを深く学ぶことなどますますできなくなってしまおうと危惧している。

若者の地域離れ・ふるさと離れは、就職の問題や魅力ある地域づくり、子育て環境等々複雑な要因が考えられると思うが、こと教育に特化して考えた場合、地域に目を向けた教育を本腰を入れて行ってこなかったがために、少子高齢化、地域崩壊、限界集落などの問題が<sup>しゅったい</sup>出来<sup>て</sup>きているのではないかと思うときがある。

遅すぎた感は否めないが、現状に立ち返って、いま一度「ふるさと」を学ぶことの重要性を認識すべきだと思う。

\*参考文献：「寒河江市史（下巻近代編）」寒河江市史編さん委員会（平成19年2月）

鈴木芳雄著「戊辰の挽歌―桑名藩士情熱の奮戦録」新日本法規出版刊

